

「かんたんまにゅある アカデミック・ライティングの基礎シリーズ」で扱われている事項について

小冊子『かんたんまにゅある アカデミック・ライティングの基礎シリーズ①～⑤』では、レポート作成の経験がほとんどない1年生を主な対象として、「レポートの書き方の基本」にあたる事項を簡単にまとめてあります。

以下では、先生方に授業でこの冊子をお使いいただくにあたり、特に必要と思われる事項を取り上げ、解説しています。授業でお使いいただく前に、ご一読いただけますと幸いです。

Q&A について

各号の初めには「Q」を設け、アカデミック・ライティングの間違った事例や、好ましくない事例が掲載されています。そして、各号の最後の「A」の部分で、何が間違っているのか、どのように書くべきなのか等について解説しています。授業の「導入」や「まとめ」等としてお使いください。

シリーズ② 要約のしかた —Step 6 要約を作成する—

まず、「① マーキング (Step 4) した部分を拾い出す」の部分では、要約作成の第1段階として、「残すもの」に分類された箇所(字数の都合上、筆者の主張のみ)が明示されています。ただし、解説の都合上、「遺伝子強化」・「人体強化」等の具体例は一部残してあります。

残された部分を読むと、まず、「格差」や「強化」という語が反復して登場することから、これらがキーワードであることが窺えます。そして、筆者が次のような主張をしていることも分かります。

人間の全遺伝子を担うヒトゲノムの解読が完了して3年経ち、ゲノム情報を使った遺伝子格差が生まれる可能性や、容姿を変えたり、運動能力や知能を高めたりするエンハンスメント(強化)が行われる可能性が高まっている。

以上をふまえて要約を作成するわけですが、作例は、「要約作成のポイント」のうち、特に以下の2点に留意して書かれています。

- (1) 重複・言い換えがなされている語句は、より明確なものを選択して用いる。
- (2) 指示語がある場合は、指し示している内容に戻す。

例えば、「遺伝子格差」については、原文の中で、「身体的・能力的な格差」というより明確な表現への言い換えがなされています。

また、「身体的・能力的な格差」は、指示語「それ」の指示対象「人間の体質や能力にかかわる生命技術」により生み出されるものであることが原文より読み取れます。

そして、「生命技術」はさらに、「容姿を変えたり、運動能力や知能を高めたりするエンハンスメント(強化)」を実現する可能性があることも、原文の中で述べられています。

「② 要約作成のポイントにしたがって文章を整える」では、以上をふまえつつ整えられた要約の文章が掲載されています。

シリーズ③ レポートの書き方（基本編）—Step 2 ルール 1：レポートの 3 要素を入れる—

ここでは、3 要素として「問題提起」・「解答（主張）」・「根拠」を取り上げ、解説しています。それぞれ具体例を挙げていますので、3 要素がどのようなものであるかを学生と一緒に確認してください。

あわせて、テーマに関する問い（問題提起）は 1 つでなければならないこと、問い（問題提起）と解答（主張）の間に論理的な関係が成立していなければならないこと等についても、ご指導いただくと良いと思われます。

また、「解答（主張）」については、「問いに対する答え（自分の考え）」という解説を付しました。特に 1 年生は、問い（問題提起）への解答（主張）を、直接本の中に見つけ出そうとする傾向があります。ここでは、解答（主張）は直接本の中に書かれているわけではなく、本等に書かれている客観的事実（根拠）に基づく「自分の考え」でなければならないことを、ご指導いただければと思います。

なお、吹き出しの中で、先生方がレポート課題を出す際によく用いる言い方「〇〇のテーマについて論じなさい」の「論じる」とは何をすることなのかについて、説明してあります。Step 2 の導入や補足等としてご活用ください。

シリーズ③ レポートの書き方（基本編）—Step 3 ルール 2：3 部構成で書く—

Step 3 では、「序論」・「本論」・「結論」の役割を紹介しています。特に、序論における「論じ方の提示」や、本論における「客観的な事実を解答（主張）につなげるための考察」は、学生がレポートを書く際に最も苦勞する部分であると思われます。

「論じ方」および「考察」については、「シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）」に解説を付してありますので、指導の参考としてください。また、実際に「シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）」を学生と一緒に読みいただくことにより、「論じるとはどうすることか」や「考察」とは何かにについて、学生の理解が深まると思われます。読む前には、ぜひ学生と一緒に、サンプル・レポートの「テーマ設定」・「内容」・「考察」について、本解説書で確認しておいてください。

シリーズ③ レポートの書き方（基本編）—Step 4 ルール 3：先行研究をふまえる—

Step 4 では、引用の仕方について説明しています。先行研究を引用する際の書き方は、専門分野により若干異なるため、ここでは 1 年生が知っておくべき基本の書き方として、『大学生と留学生のための 論文ワークブック』¹⁾に従うことにしました。

また、引用には「直接引用」（他人の文章をそのまま引用する）と「間接引用」（他人の文章を要約して引用する）がありますが、ここでは直接引用のみを取り上げました（「シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）」では、直接引用の他に間接引用の例も入っています）。

なお、直接引用にはさまざまなルールがありますが、ここでは、最も使用頻度の高い「 」と、（中略）の使用についてのみ取り上げています。その他のルールについては、必要に応じて上述参考書等に基づき補足してください。

引用文献

¹⁾ 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子. 大学生と留学生のための 論文ワークブック. くろしお出版, 1997, 187p.

シリーズ③ レポートの書き方（基本編）—Step 5 ルール 4：文献リストをつける—

Step 5 では、(1)引用箇所と引用文献（「出典」とも言います）の関連付け方、(2)引用文献の書誌要素（著者名、書名、出版年等）の書き方を扱っています。

まず、(1)引用箇所と引用文献の関連付け方についてですが、本冊子では、『参照文献の役割と書き方 科学技術情報流通基準（SIST）の活用』¹⁾に従い、バンクーバー方式（引用順方式）を採用しています。この方式では、引用箇所に通番を付し、その番号順に引用文献のリストを作成し、番号によって関連付けを行います。なお、専門分野によっては、引用箇所に著者名と出版年を書き、著者名・出版年の順（著者名は 50 音順またはアルファベット順）にリストを作成し、著者名と出版年によって関連付けを行うハーバード方式も用いられています。

なお、文献リストを書く際、(i)引用文献（実際に引用した文献）のほかに参考文献（参考までに挙げておくだけで、本文中で引用していない文献）も記述するか、(ii)文献リストをどこに表示するか（引用箇所と同一ページの下部に表示するか、文末に一括して表示するか）、(iii)文献リストと注（本文の補足説明）をどのように表示するか（一括して表示するか、分けて表示するか）、(iv)繰り返し引用した文献をどのように記述するかといったことは、専門分野により異なっていたり、明確な規定が存在しなかったりするため、学生も迷いやすい部分であると思われます。

具体的な文献リストの例は Step 4 で提示していますが、まず(i)に関しては、レポートの書き方の基本を重視する意図から、引用文献のみ記述しています。(ii)については独立行政法人科学技術振興機構（JST）が管理している『SIST 08: 2010 学術論文の執筆と構成』²⁾に従い、文末に表示しています。(iii)については、SIST（科学技術情報流通技術基準）においても明確な規定がありません。本冊子ではレポート関係の参考書において一般的な、注とは別に表示する方式を採用しています。(iv)も同様に規定がありませんが、引用文献の種類に幅広く対応できるよう「前掲 1), p.11 参照.」のように、できるだけ簡略化して書く方式を採用しています。

以上のことから、(i)～(iv)について特に 1 年生に指導する際には、本冊子で紹介した書き方はあくまで基本であり、専門分野が決まった後は、学会等の規定に従って書くようご指導ください。また、必要に応じて、先生方のほうで推奨する方式をお示しいただく等の補足をお願いします。

次に、(2)引用文献の書誌要素の書き方についてですが、これも、専門分野により異なっています。本冊子では、特に 1 年生に書誌要素について理解を深めてもらうと同時に、基本の書き方を身に付けてもらう目的で、『SIST02-2007 参照文献の書き方』³⁾の規準に従っています。

『SIST02-2007 参照文献の書き方』は「科学技術分野全般での共通した引用や参考文献の書き方の基準」⁴⁾とされています。1 年生の段階でこの書き方を身に付けておくことにより、専門分野（学会等）の規定に従った書き方への移行も、よりスムーズになるのではないかと思います。

なお、(2)は引用文献の種類によっても異なります。Step 5 では、1 年生のレポートで特に引用機会が多いと思われる「図書（一般的な本）」・「新聞記事」・「インターネットの文章」のケースを扱っています。書誌要素と書誌要素の間の区切りとして用いられる記号も、『SIST02-2007 参照文献の書き方』に従い、ピリオドやコンマを使用しています。あわせてご指導ください。

なお、『SIST02-2007 参照文献の書き方』では、「図書（一般的な本）」・「新聞記事」・「インターネットの文章」以外の文献（学術雑誌等）を引用した場合の書誌要素の書き方も、提示されています。また、『レポート・論文作成のための 引用・参考文献の書き方』⁵⁾では、『SIST02-2007 参照文献の書き方』に基づき、図書や学術雑誌のほか、テレビ番組や映像資料も含めたさまざまな文献が扱われています。1 年生から質問が出た場合に、参考にしてください。 （引用文献は次頁に掲載）

引用文献

- 1) 参考文献の役割と書き方: 科学技術情報流通技術基準 (SIST) の活用. 独立行政法人科学技術振興機構, 2011, 23p. https://jipsti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST_booklet2011.pdf, (参照 2017-6-12).
- 2) SIST 08: 2010. 学術論文の執筆と構成.
- 3) SIST02: 2007. 参照文献の書き方.
- 4) 藤田節子. レポート・論文作成のための 引用・参考文献の書き方. 日外アソシエーツ, 2009, p.i.
- 5) 前掲 4)参照.

シリーズ⑤ サンプル・レポート (基本編) —レポートの付属要素について—

シリーズ⑤では、「シリーズ③ レポートの書き方 (基本編)」および「シリーズ④ レポートの書式」で取り上げた事項について理解を深めるために、サンプル・レポート (基本編) を掲載してあります。

サンプル・レポートを学生に読ませる際には、レポートには付属要素があり、それぞれ書き方が決まっていることについて、学生と一緒にご確認いただければと思います。

- (1) レポートの初めに「授業科目名」・「主題・副題」, 「所属・学年・学番・氏名」を書くこと。
- (2) 節ごとに番号を付し, 見出しを付ける必要があること (本論の見出しは, 根拠の内容が反映されたオリジナルの見出しを付ける)。
- (3) 注 (本文の補足) がある場合は通番を付し, レポートの最後 (文末) に番号順に記述すること (「文末注」と呼びます)。
- (4) 引用箇所には通番を付し, レポートの最後 (文末注の後) に引用文献を番号順に記述すること。
- (5) 複数ページの場合は, ページ下部中央にページ番号を付すこと。

<主題・副題について>

レポートのタイトルは, 研究の方法や視点, 扱った対象等^りが分かるように書かれている必要があります。特に1年生を対象に指導される場合は, 基本を身につけるという意味で, 主題は「テーマに対し自分が設定した問いが何であるか」(扱った対象) が伝わるもの, 副題は「何に着目し (どのような観点から) 問いへの解答 (主張) を導き出すのか」(研究の視点, 論じ方) が伝わるものにするよう, ご指導いただくのが良いと思われます。

<注について>

書き方は, 『SIST 08: 2010 学術論文の執筆と構成』²⁾および『SIST 09: 1987 科学技術レポートの様式』³⁾に従っています。具体的には, 注について以下のように規定されています。

『SIST 08: 2010 学術論文の執筆と構成』

- (a)注は, 本基準で定める場合を除き, 多用してはならない。論文の論旨に直接関係する内容は, 注とせず, 本文中に記述する。
- (b)注には通し番号を付け, 脚注の場合は同一ページ内に, 文末注の場合は本文の最後に記載する。

『SIST 09: 1987 科学技術レポートの様式』

- (a)本文中に記載すると文書の流れを混乱させるような事項は, 当該語句に記号等を付け, 章, 節等の最後に注として記載するか, 同一ページ内に脚注として記載する。
- (b)記号等の表示は, 参照文献とは区別するようにする。
- (c)注及び脚注は, 必要最小限とすることが望ましい。 (引用文献は次頁に掲載)

引用文献

- 1) 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子. 大学生と留学生のための 論文ワークブック. くろしお出版, 1997, p.168.
- 2) SIST 08: 2010. 学術論文の執筆と構成.
- 3) SIST 09: 1987. 科学技術レポートの様式.

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—文字数について—

サンプル・レポートの文字数は2163字ですが、実際のレポート課題では4000字程度が必要な場合があります。序論（背景説明）や本論（根拠・考察）の部分でもう少し詳しく述べる、結論においては、評価（このレポートで明らかにできなかったこと）や展望（今後の課題）を述べる等、必要に応じてご指導ください。

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—テーマ設定について—

このサンプル・レポートは、「現代社会における姓」というテーマで論じたもの、という設定で作成してあります。そのため、序論の背景説明の部分で、「夫婦別姓」や「離婚」、「再婚」という概念を導入し、父母の一方と子の間で、異なる姓（名字）を名乗るケースが増えつつあること、その場合の子の気持ちや考え方についての報告が少ないことについて、簡単に説明してあります。

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—内容について—

サンプル・レポートは、「母が離婚または再婚した事例」に着目して、子の姓に対する考え方を明らかにするという内容になっています。

この内容を学生が読んで理解するためには、事前に、氏（姓）と戸籍に関する知識が必要になります。具体的には、氏と戸籍は連動していること、母が離婚または再婚した場合、子も自動的に母の離婚後・再婚後の戸籍に異動するわけではないこと等に関する知識です。また、「子の氏変更」制度に関する知識も、ある程度求められます。

なお、「子の氏変更」制度につきましては、本論の「前置き」部分で簡単に説明してありますので、指導の前にご一読ください。また、必要に応じて先生方のほうでも補足していただきますよう、お願いいたします。

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—考察について—

本論「考察」の部分では、考察が具体的にどのような作業であるのか解説してあります。

その内容を簡単に言い換えると、根拠として述べた複数の客観的事実を、共通点や特徴等に基づき、筆者の解釈としての新たな概念に置き換える作業、と言えるのではないかと思います。

具体例として、サンプル・レポートのほうでは、中高生や20歳を超えた社会人が「母親との同居生活上の支障」により氏を変更したケースと、「自分の氏はみんながよく知っている」・「運転免許証の変更をしたくない」といった理由から子が氏を変更しなかったケースが、「生活における不都合といった現実的な問題を考慮した判断」という新たな概念に置き換えられて（解釈されて）います。

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—語彙・表現について—

サンプル・レポートでは、レポートでよく用いられる語彙や表現が随所に使用されています。「シリーズ④ レポートの書式」で取り上げた表記法以外のものとしては、以下のものが重要と考えます。

- (1) 「本稿では…」→「このレポートでは」と表現したくなった際に用いる。
- (2) 「筆者は…」→「私は」と表現したくなった際に用いる。

その他の語彙・表現は、『大学生と留学生のための 論文ワークブック』¹⁾等から補足してください。

引用文献

¹⁾ 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子. 大学生と留学生のための 論文ワークブック. くろしお出版, 1997, 187p.

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—直接引用の『 』について—

サンプル・レポートでは、直接引用についても、「シリーズ③ レポートを書く」の中で扱われていないルールが適用されています。

p.1 の下から 2 行目に、『 』が使用されている箇所が 2 箇所ありますが、これは、他者の文章の中の同じ場所で、予め「 」が使用されていたことを示しています。

シリーズ⑤ サンプル・レポート（基本編）—間接引用について—

引用については、「シリーズ③ レポートを書く（基本編）」の Step 4 で扱っていますが、ここでは「直接引用」についてのみ解説しています。しかし、実際のレポートでは、「間接引用」が行われる場面も非常に多いと思われれます。

サンプル・レポートの本論「客観的事実 1・3」の部分では、間接引用が行われています。ご指導いただく場合は、以下の点を強調していただくと良いと思われれます。

- (1) 他人の文章を、必要に応じまとめ直して（要約して）用いる。
- (2) どこからどこまでが他人の文章であるか、読んで分かるように注意して書く。

例) ○○（著者名）は、□□□□について、以下のように述べている。まず…（引用）…。そして…（引用）…。さらに、…（引用）…としている。

<書き方例のポイント>

まずトピックセンテンスを書き、一旦文を切ります。引用の部分では、文の長さに注意しつつ、途中で文を切りながら、接続表現（まず、そして等）を用いて引用を続けます。最後は、引用の「と」を含む表現（と述べている、と指摘している等）で終わると、他人の文章の終わりの部分が明確になります。

本冊子のご使用に関するご意見やご質問、ご要望等は、下記までお願いいたします。

学生総合支援センター（修学支援ユニット）
専任教員：坂本智香（内線：8925） e-mail: sakamoto_c@kochi-u.ac.jp